前太平記圖會

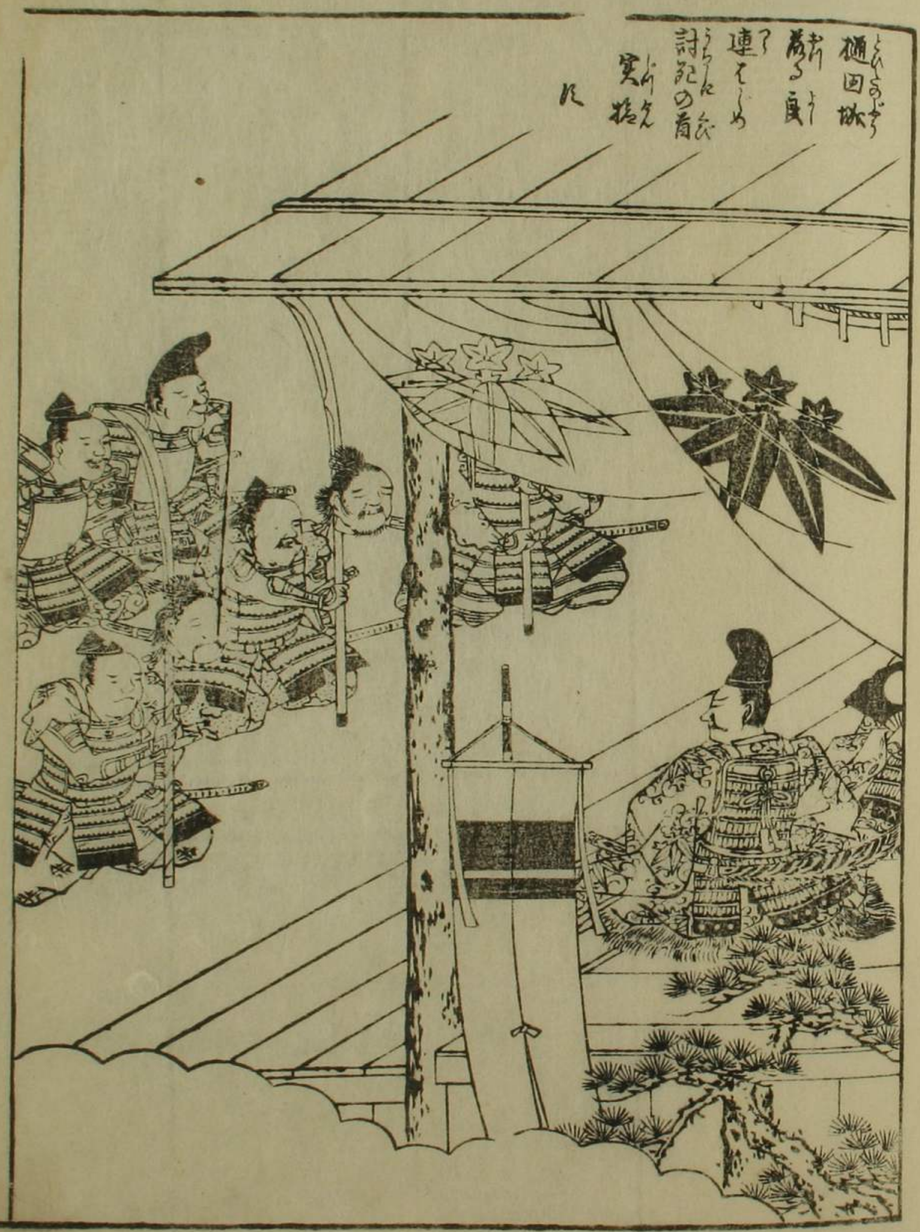
五

特へ伊13
1830
5

1830

目錄

純素陣屋雷火
宦軍陷菱形山城
純友純素兄弟不和
純素以謀乞宦軍和睦
滿仲來駕敵城中
箱崎合戰純友一族討死
為純友父子虜
諸將上洛蒙勸賞忠文為惡靈
村上帝即位天滿神鎮北野



源頼光誕生

六孫王経基薨逝

村上帝崩御評立太子

西宮殿流刑

満仲朝臣住吉参籠蒙示現

美丈九放逸仲光諫言

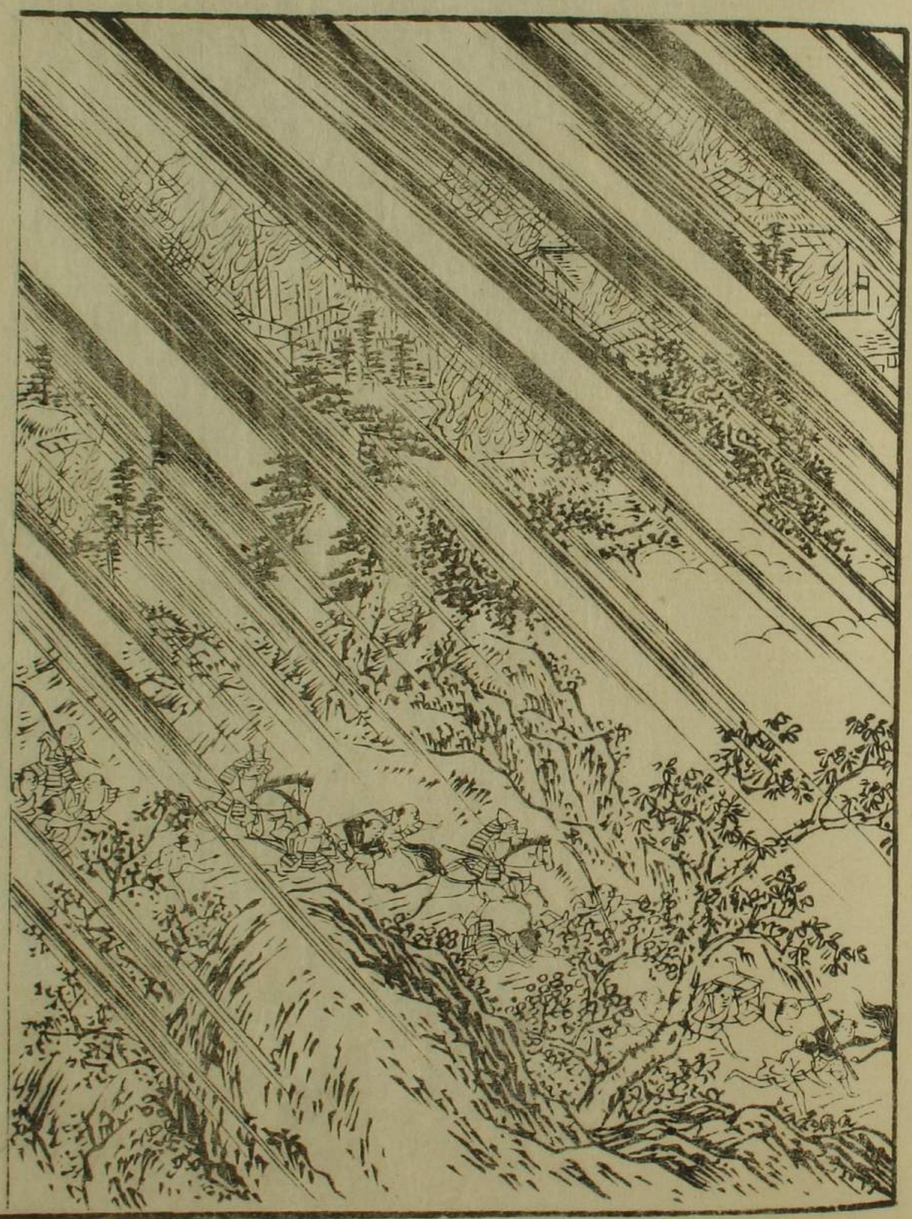
幸壽丸代美丈君命

前太平記圖會巻之三

純素陣屋雷火

同年七月八日追捕使長官は安藝保周防介頼連入道康俊張良宗固
ら追を乞ひ給ひ此捕十人をして討取の首十ヶ室積に掲げ大将斜ならず悦び給ひ
都督を感じ給ひ別ちて附与へ此報をさし語らはしめて又時に是が役行事物に賞
数あり又一走太刀一振ども其家の子中に出来しを以て其頭ひとつ切り出し抽ぞて首つるは既
てせま捕を下津の凌よ引出して一人の首を本にとられ軍神に祭り見る所は稲村年六家
又純友が張置ものの首を長府の城をとりて在合はせし越田をして落失
追捕使高國に入て兵士を召集め佳ましく軍兵どもは入りて一釈の中に落失
とくも乃ち稀るもの多く骨肉の一族譜代の新参も其百人十騎に入り急ぎ今は
まく此城を守らん事もかなはじとてそれ小舟に乗り漕ぎ大宰府に落行長
門の採木かうなるに去りて純友は法方軍勢をとてもむけ失てかんずるもの城を攻せたる由

宰府以西の郡々を召して降ぎ〇し給ふとも其外の名乗に落ざる所は今は全て
右衛門佐純素は卯の年も兼純正一万人を引て紀から引て又を渡し迎へし
主宮権亮純素二万余騎を以て捕使を引具して宰府に向ふとれは純友が
参く惟人席を追付て又討勢を待べき旨兵を催なる故純素に先
是よかしてよりも此後は事あるべし今は未だ〇〇くべきにもなりけり中々に谷
九州しても〇ろ〇にあらずとて九州を一ぐく肥前筑後
に落しいまだ従へざるもの人数を乳ぶる宰は陸ぎ筑後みだれ人ども敗軍の士卒
かく摘竜なさるべくく仰の〇のままとる住家にさたし越勢が逆やると安べきとを招ておるべ
寂かんの独へば此軍勢ともむけ柳川を囲せ一人も洩さじと後田でもを豊前國柳が浦に
出張して乃ち将軍に別ね京家の武士を海底に追込みぞと仰を感して山をいて城を
もちやがて軍勢の手分して右馬頭佐純素は兵千余騎をおぼへて筑後國にさし
むけ大宰少弐の勢と連柳川の城をとりまゐせたる者出張の先陣は当家の佳例なるべ
しとて今度も権亮純素に二万余騎を添て柳が浦に陣をとれる伊予掾純友へも勢を



波太度毛祢霊
弘法ゝ純素の
陣屋焼る

残兵とく四里引退て筑前国黒崎に至りかくて長門に今太宰府を攻き
んと鼓をさめて兵粮将もなく打ちんと推量しにひの外に多くありしは
急さん是ぞかくして諸軍議ありけるは西国東国の関を守りさる所に通じ尽
瀬戸内をつくり海上やく舩のかけ引自在なるほど御方の大軍船軍に立まじべ
舟戦を経く平均のごとくしる上に兵ありよくかけ引によく数多艘の舩をあつめ
其用意なくてはまた大将純友は手を傍へ送りて味方も術をそへてさぞ
退くとく浪表なる檣楯の陰に投松明をいくつともなくうちならべて兵船の戦術せし
焼打ざるとまで廃しくしくこそ詰りけるまかりなる所には月廿一日波打際も昭神
の社鳴動しければ社人急ぎ猿を消しこれは何事のたるかぞと鐘を鳴し祝言して神意
をとぶらひければもそこに止まずかく打ちまる程古車軸を流し雷光地に
布雷鳴天にひびきわたりてあへや世界も滅却するかとあやしまる月の暈かくに没し
て海中にあらく風起りてかくていた車輪のごとくなる雷火は俄に数千艘が

陣屋の楼閣におちかくれのごく積みたる投松明に火付けて数百余艘なる程の櫓楯一
つも残らず焼失す軍兵ども驚きさわいで逃あはてふためきける中にも
猛火はうちまに雷電のいかつちも止ざりければ落ちたる心地して是非もなく近迷ふ
純友が殺所の大将ともにこれにたちて兵船へと引退てかくては叶はじと見えしが
賊徒なる兵どもにおいては余りにひたくくる所にもはや止まりて不思議とふも是ぞ月廿二
日軍の手分ありしにもかくて陣中へ押寄たる所に権亮純素大将にて殺所を焼き柳
浦を引退て今は是までと敵の寄る事なく波海ありしに廿一日俄に件の舩を
見ても友軍残りなくて純素が舩陣を寄せく柳が浦の陣をとりしが廿二日権亮純素二万余騎に
て柳が浦の陣より敵の陣をうちまたせかへば味方に大軍がる雲霞のごとくに打囲みけるが
大勢のほどにも純純友なりしも純素が本陣大勢の猛ねる所を大勢をかんでも又
此勢を合せてゆくやたて合せ射させ入れて波戦して其後国々の勢千騎二千騎ばかりを
入る者はそとまでとて悉く遂とのき合せるまる別條にけまでもあらざりけれども小勢な

よつて純友ついに打負けて又黒崎へと引入に好古朝臣猶もつゞいてまでも追手ハ
と進をとゞめ防ひかるを経基王軍使をもつて制しとゞめ防ひかるゆへ此時須我
暮かゝく追うけとは逃るゝ賊をも四ろにわかれその大勢にて黒崎に入て味方へ
今般ようやく追ひ疲たる兵共の運ハ敗せんとするにあるべからずと推量をなし河その
まゝ攻やめらせた純友は官軍とらへずてんで黒崎の中途若松浦の山際に兵を伏て
待所に大勢好古朝臣ハ夜ハ敵わりとも知り防きたるをやめて打拂ふに純友が勢ハ
後より引つゝんで国を呼さけよつて来る官軍是にあわてふためきいかゞハせんと度
をうしなひ経基王を守り引しハ婿男なる助源次仲光先陣の大将として蒲田佐加藤兵
衛清衡者先と言て其勢一萬騎にて廿日寅刻に打立引ハ経基王を二萬余騎を
従つて卯の上刻に出るむかしく好古朝臣ハ御方の二萬騎敵の二萬八千騎にて
立らと引返し河をわたり来れたる助満仲も河わたるをてみせて引ひ
らば好古の勢ハ荒手を出し河まで引返く純友忽ち持ちて大将頭を馬をとつく荒手の勢と

らけ向ふたる助の勢風翔巻雲山口廿月がでゝ南の山お避よりかけ出し防守某
陣の張せうるの足立よつて口なしを甚蒲田佐ハ後に開くに左に待にてそ加藤兵衛ハ陽
たひらゝくも陣と向ふ手たる助ハ中軍をとゞめたるのまゝ進み等くひ人防てその威
傑然たるに待男をそくいまだ残るるの純友が陣を落よろに攻てぞ乱たるを
三 蒲田先鋒の動静をうんとく歩立の射手を出して射させたりこれハ矢表なる兵
八百余騎さんぐに射立らたひひはんと備て付て甚陽にうつて走んとるるとし
とさんざん加藤兵衛が二千余騎るの鼻をさうそべくうけ走るべしめたる敵の勢返
され逃もさらふべき捨鞭打て引く引後続よりく兵をまとめ国を繕うけ小を遅ふ
其又十余騎所純友ハ二度の軍に打負て烽火とて黒崎へと引返く

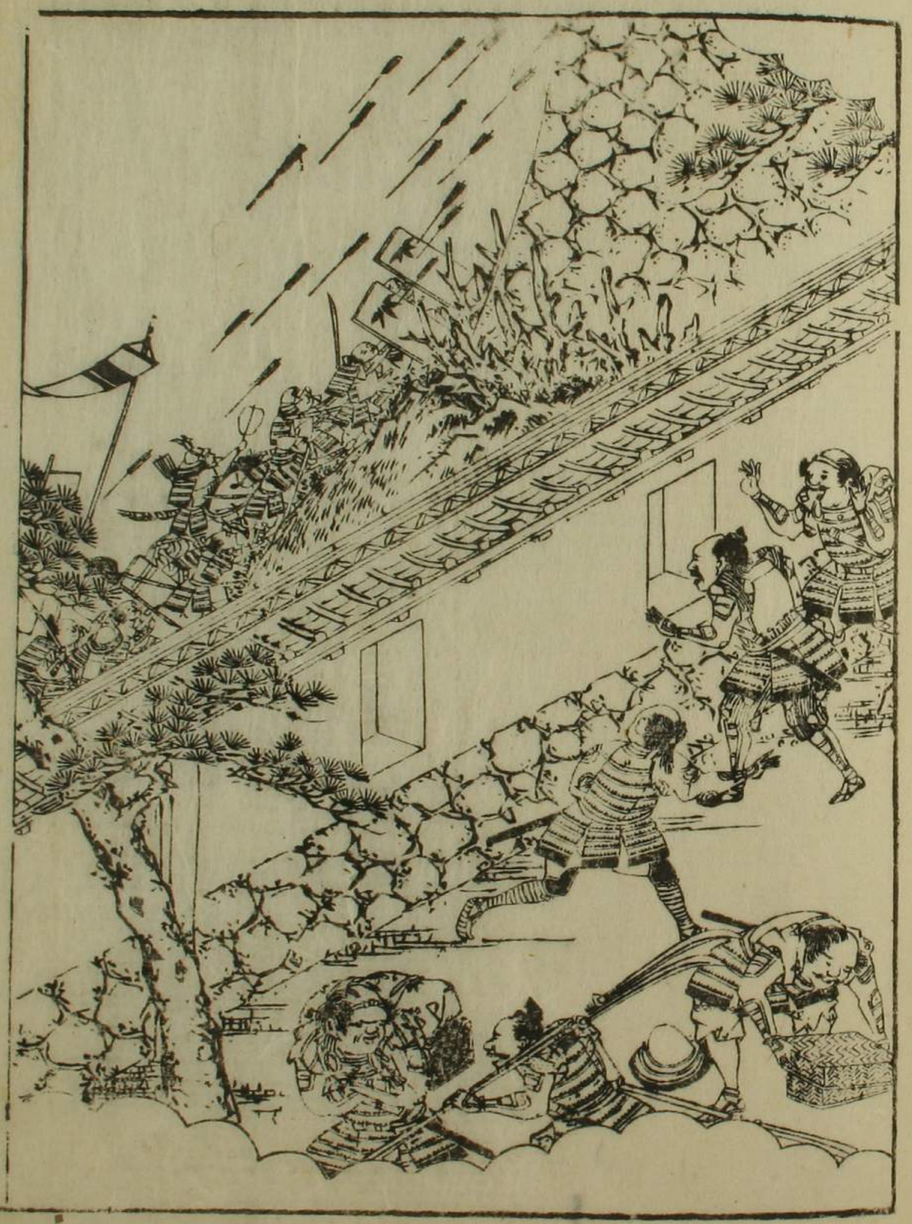
官軍陥蔓形山城

そのゝくの所ひたるも官軍然ば筑紫にして防人は賊徒一日もまつてえんだ此時に没落る
ばしと云ひしにおのゝがかに帰て数日然鎮まざとも城中矢種も尽にけりて官

等は屋〻うつしとゆえんなるべし運をあつかひしうりく公と一編に生みせし國〻の勢
たちまち款に属し風〻に城とる西一所〻に関をつけく津浦をかてうりく
長門國にいたる字赤間関に二ヶ所に関を置くに傷をさくふくるる官軍兵
粮運送の役絶く次の年国霧に出に入り国〻の数なるひ出来ると
なるひ事をたたかせく中国にてくるるもじめ八万俵ばかり八月
上旬にいたりくいに長州にも出ざりうち幕府資軍を引くく迫るの村
くをたに入くまを稲を刈ち出て研〻く法軍勢の兵粮にあくらまをれども
うちうち新米をくく今一度日〻もちくがうかくてい始終いくなるべしとあんじ始ひ
なる所に八月十七日出て前国宇佐の神宮本を補を思ひそうに使者をとをせて
やくるへきるはう純忠自拵の財のるはくく南国美形山の城をうる兵粮五
千俵石大豆三千俵石銭をうく則由好新三郎名通二千俵ばかりく彼城をうて
補銭にいそを所庫を引まひくくの城をと延出くく御銭ひて御不出もはば軍

軍勢の落ちるところの粮米物運送の途をとる西一方に忠ろ中ひにまうせをて
大体の計畧なるべ年とくく十八月の秋半ばうにひそ兵庫をそ引ろ入絶友和を
数のおちたるうりいそだ兵を出くく延付にてよくく甚勢一筆海揉にうて
ど進ろけたり官軍の先庫を清門射者をそ大義逆まを実只千俵決に行波吉
小野保衛三千俵瑞中軍に敗大名小野好右名左小孫王原俊基を始とくく
赤の所一族八十俵人甚勢二筆八千俵瑞浦庫に逆ろ引下くたる関原満仲甚
国加義と相具し甚勢七千俵瑞にく国にるとうををるをそに敗くもくにぬく
太松浦をを兵ろの時くにうにあくくぬろうををるをそに敗くもくにぬく
そくを生なる法仲也もさらだ行いびちくそ寛をの方傷なるとくく一度たるを片
岡の面ちうるに歩三の射をとのくく大百俵人楠の板を雄羽に寄をるべ去来
解く推紀く強を渡くく越てくうを庫に二町俵く引ちくぐひくるの時を兵庫

官軍敵の
美形塚の
兵粮米
奪ひ



以て其勢八千餘騎にひろがりて退よの勢緑波を傾かけたる
一る場にかけちらさんとおもひたさけんでせたうる結の六けたる歩三の射ほさ
こう引結夫稚とをゝまに射々るる敵射ちゝまきまてそゝ光のいさかひに相
遠ゝたたかひこもねるうたる助さんぐゝ陣をとせ弱へ退よの勢もお
かうに河ゝく入ゝるまてゝ戦ひるるたる助法仲法寺正義に迫じて和泉弱へ
々る敵味方の間山海に動揺ゝくおびたゝしゝ吹えれば後陣の軍後ゝ
で法仲の舎弟左衛門法師と合せくゝ合せ弱へうる敵勢
を大勢ゝうんゝとぐれいやゝく多勢ちゝ敵せゝるまもゝゝ引く
ゆく海安兵衛兄弟大きう上げ甲冑ゝ敵ゝるの足をたゝく
強しゝわれ者ゝれども耳にも聞ぐ穢ぎにし迫たりるたる助の兵ども
さのゝ者迫せんゝゝゝ凱歌吹とよせゝゝ人ゝに退付ゝ兵弟ゝ
るとやめ引ひろう敵とぞに明るまて官軍義侍をゝ

なりるまて安そ和泉の国の西後海賊多其勢八千餘人柳が浦に陣ゝ
て待ひゝ先陣大尾門射芸の達人大義亜三郎実忠ゝ矢ゝ
るの敵人よりおりの傳来ゝ
切ゝ月後の敵ゝ攻せんゝ
もゝゝ切ゝ
ゝる迫ゝ
の敵ゝ
問をゝ
ゝ
迫来ゝ
大将ゝ
岩ゝ

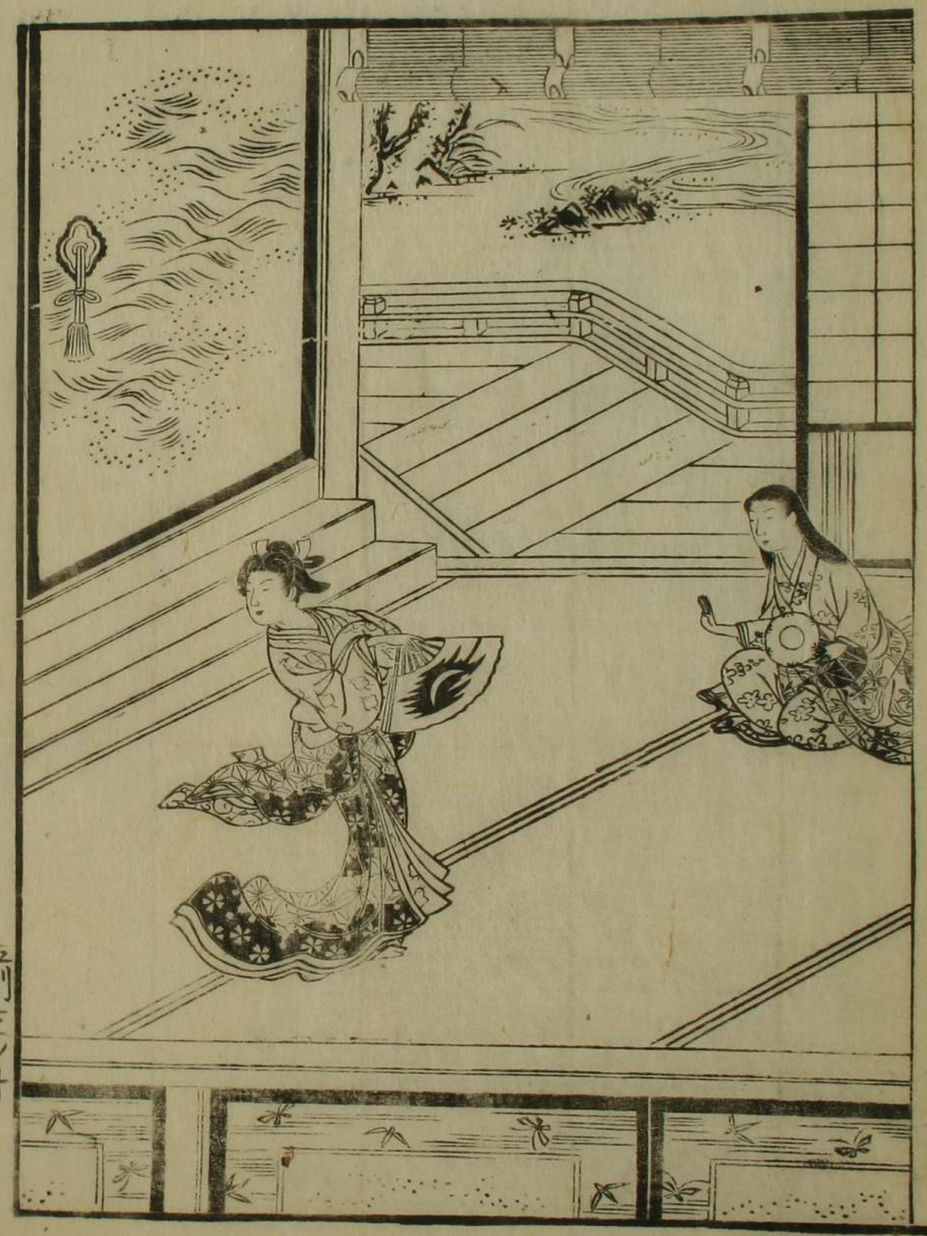
官軍の惣帥に付られまする軍功のつゞき彰義紙やいろはじと返さをうて会稽
をやめらまてだう紀通斜ものびよろこびて城中より繁る所の兵百九十二人を
降人に成てぞ出たるかくく法たれるの城に入うと行て張紙通をとゞめ降
来の紫つ人も深 法ばく人にく礼を尊ゝ仁を敬ゝ行ひ人をゝ紀通たちはち
紀敬字力の名ひるゞとくめつゝ官軍合体の志を伸まるくでさんたるる

紙友紙素兄弟不和

独る和に紀にいな軍務利をなびゝく賜後いよゝ憎疑もとゝ出えられば深紙
せばんびゝ集に辞退ゝ出るゞくくゝ法る法に動ゝく大法秘法紙
せゝまとる中にも延暦寺の明達八位吉祥文院におひて異端門の法紙沙宣
くるに一のお弱ぞたつくる貴二月に面て堅上に紙友紙素二人ぶ姿たゝまて
奇法と引さげ兄弟東西に三さうれくお戦ゝまゝ附ゝうゝるに三角えを
る紀をあゝ三人とたたの御ゝまに抱で邪堅の巻の中に抱入行ゝとうえられば明

達に彼法の功力をてに引まぬと紙紙おのくいよゝ丹城とゝ行ひくる宮
保紙の力にや横ゝん伊藤掾紙友を法ゝ宰府に流く居ゝ十月下旬
紙に兄弟中熱く紙く指亮紙素其勢三系彼法を引分く悪徒城に乱
くるに入へくるるまやらんと法にあこうとゝ紙まゝ引近て後紙友を惱
つ入ゝに紙のそのてとゝたのるべきくく義形ゝとゝづゝ設んゝもてび明義酒宴に
軍旅をとゝ傾城妓女の色に匿を焼遊女をいとびなまよく紙求るまに
松ゝの子代ゝとひゝ拉来に九郎才一の美女にく垂数の舞妓をうるゝと指亮紙素
兄弟びくゝ女とゝ合おるに紙友に来と同く紙く其弦次に兵と使くゝ紙ゝく
寄ひゝくゝ具ゝたる仕丁寄に紙ゝ撫でゝまちくに紙く近たゝるゝ中に
ゝくゝ男一人紙のゝるゝ使ゝく法目に付く其紙方とんゝるゝに法紙友が
寄にぞたゝるゝの男ゝゝ紙く指亮にゝる紙素大に怒く紙の系ゝるゝこの西
べきや林ゝくもゝづゝゝ夫和に面て手人命紙をゝまびまに致紙を抱く強奴を深

純友天女と集て駘蕩の図



繋〻今緣列運と一時にひ〻く氏を九國にふるひ給へ玄宗を
たゝひは胞の義をうしなつてもは芳を後にとゝ結湖の名のるべきにあらんけ給
なびき給へまことに遺恨なまこと仏果菩提のみちにひるゝ某に若しとかく緩怠
の振舞をこしたのもうらぶたくも勢を引まけ軍府をすてゝたれべたちまち
骨肉連枝の安穏く寇讐怒敵の中と我をうりにくるむ〻この代才六世玄
宗皇帝にまもしいたる極え年八月左子の位につき給へ國を治め民を慰給へ
て二子のでく一天を平にしく已海安泰なりまに弘農楊玄琰一人の女を招
楊家の女たるにようて楊を名とつゝしめて長く天のすゝる弱蕊傾へうづゝ素
ゝく地に敷ける宮女の中とゝ我をうりにくるむ〻この代才六世玄
所光寿皇帝求ひうひて妃と〻給ふ強るに玄宗ちまたに若敵を棄にさ
國色無双なるを以て紙を給ひ石宮に納んて紙を給へども内ゝ給へ
寶已年八月に韋昭訓とうすの女とりて妃〻にたまと奪すみく后

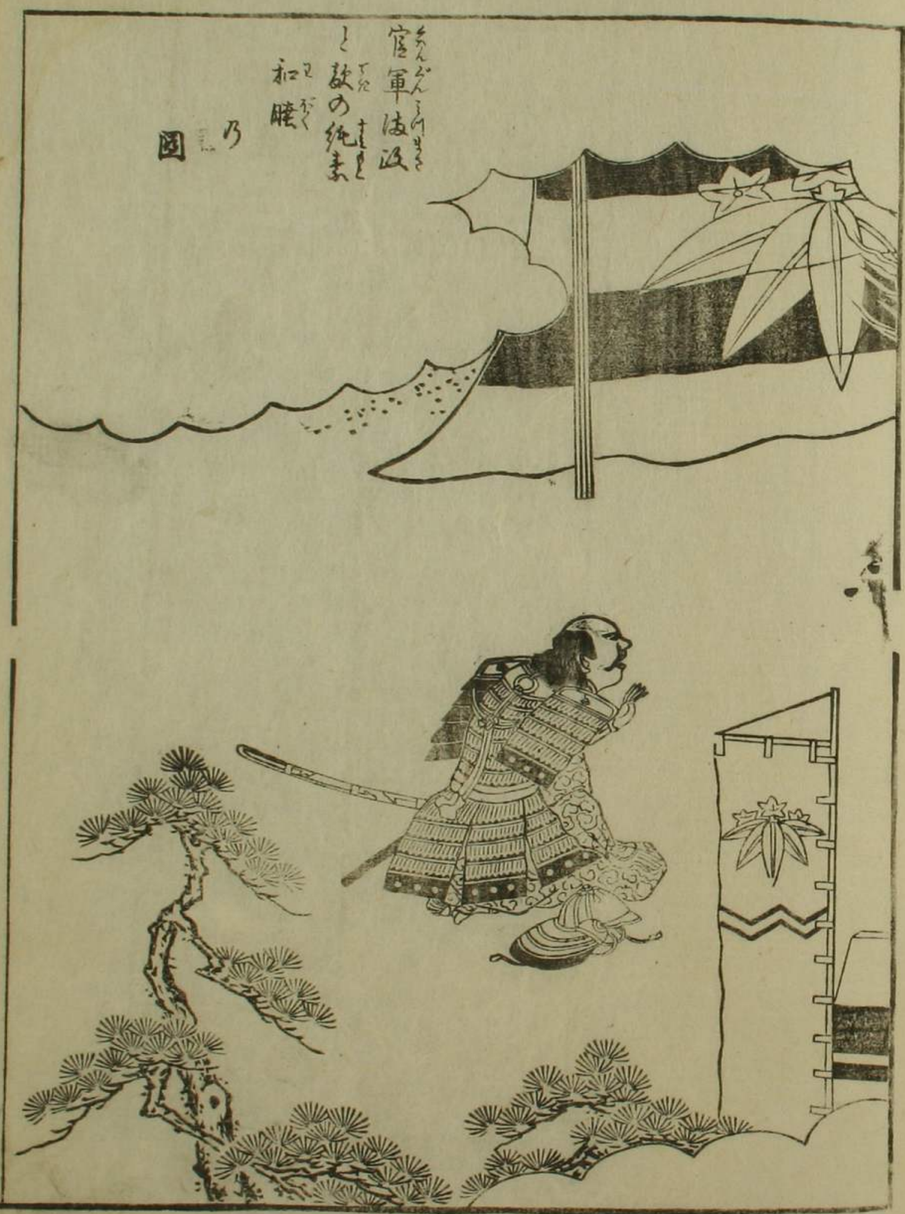
妃の位に後に直名を改て楊貴妃と号に頭をあげて一笑び百の媚あり六
宮の粉黛さ〻に顔色なく三千の寵愛一身にあり兄の楊國忠を丞相と
天下の政務を掌むはひに東平郡王の尉をたゞ安祿山謀叛をたゝして
玄宗帝と蜀の國に退ろうぞけ貴妃をるカ士に下施く佛堂に乗て編鼓
天徳二年十二月玄宗蜀より京師に移て今純友兄弟の命に背に人を花
のゝ匂ひ色を〻ひ才とを〻一家二の位にまく賊乙とまゝくて拾も春の島の
初日と結ぶでくゝ匂うと人〻の唇紙翻ぜり

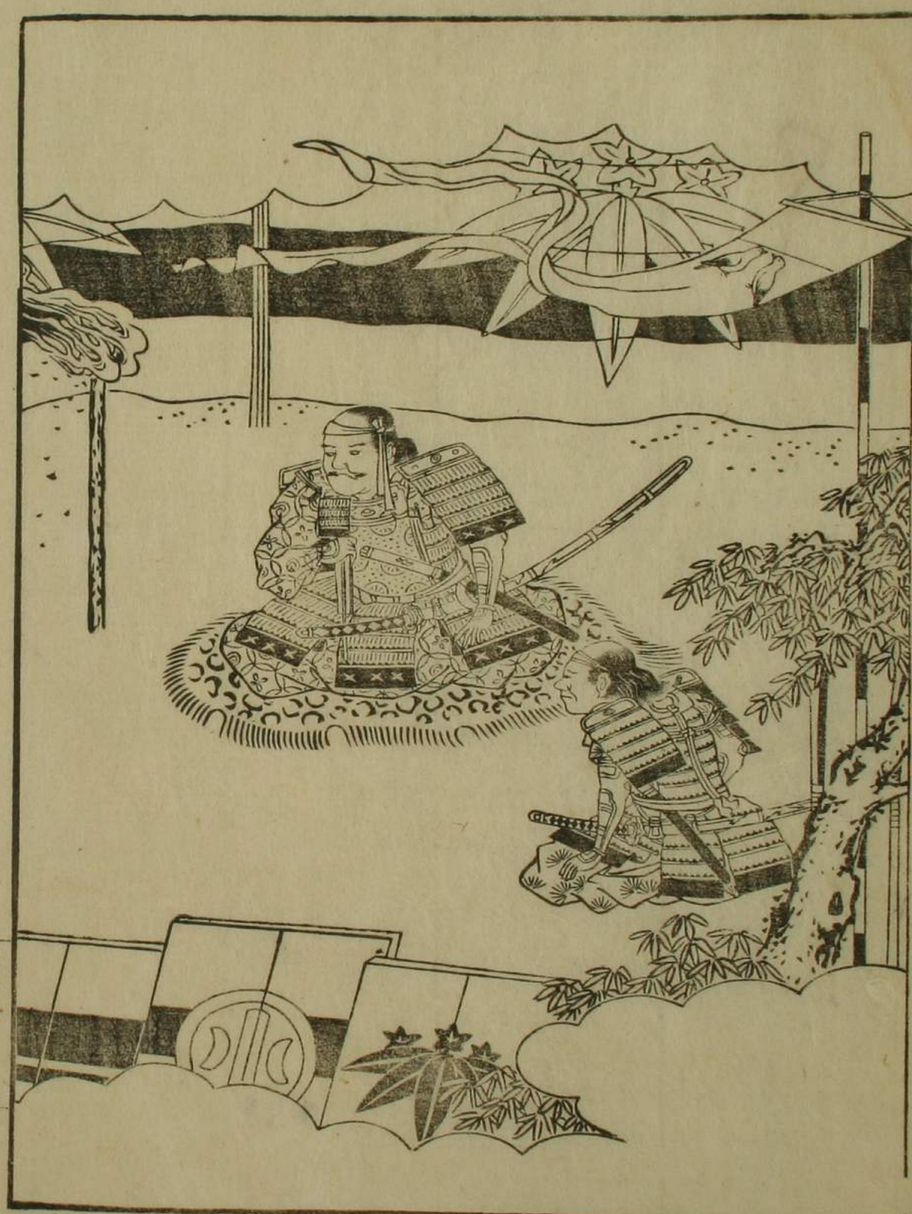
純素以謀を宦軍和睦

かゝく純素ふが謀し軍衆謀に宦軍の大将た馬助満仲安弦ひ秋を紙分に
いゝと戦ひを〻ゝも雄雄いまぞ世ぜに数日紙歴ゝ三月上旬にてうゝる城に元
素の要害にく兵三万騎にて強う矢種兵粮阜数にたくいへをたれ世も弱
たる体もゝく素の多潜紙以ゝく素まべ城中粥をうへゝ世ぜにゝるる毎日数味方の

手負死人其数を算るにいとまあらずされども官軍ハ日ぐに諸国の軍勢馳加く
はじめハ一万五千余騎と聞えしが二月十一日の其時にハ已に二万六千余騎と成
しかる處に数日の軍に戦ひ労れ日十二月の夜ハたゞ紛れに軍をやめ城中にこ
関を閉升候を出して士卒こゝろ体を休めたり官軍も夜討や入ると夜まハりの武士
陣々をかけめぐりきびしく警固し其外の軍勢ハこの帷幕をたてゝ甲冑ながら
鎧を枕として労を助くるかゝる所に純友が旗下の将藤原玄明
とらへとの備に兵衛尉をだしが陣屋に来て申けるハ抑純友ハ東国平
将門がかたらひに従ひ天下の叛乱をなすといへども純友ハ鯨鯢の流石
にそれがしも日本をぬすまでて共に翰駿の名を残るとまて今にいて千度百たび
倫を噬といへども天に益なし終るにハ其類を守る事純友が不義を依ても私がら
宿運を遂んとありされハ軍府に降参せしむる事に正に幕下の囲に逢て恐ハくハ
らく桃鉞の及ぶ家の罪ひ勝の是非をさて臣今千兆と悔悟を謝して軍

忠なく官軍にくだりまさんとハ旅がくハ幕下の器量恐れ今まで罪を謝し
て手合せより今日にいたるまで片時の戦ひ略の方にハ連判をさへして今日領
東の賊徒をぬいていくさ数日の籌策をのべひとへに公の中峯にいたるを詳誌
て幕下城中に帰るまで一時の會をのがさず連日の軍労をなぐさめんとも
御要公の附されにくれハ嫌疑を避ひんために城中の兵をことぐく柵下に出しらべし
たゞし窓庭の為に兵害の兵卒百人ハ城中に拘しいて幕下来るを待しと率和
睦の後ハ已に麾下の後より従くして官軍に帰り翰駿追伐の下知をまもらん臣が偽ら
ざる所あらしめんず神明の知見に任んため起請言の一紙
をしたゝめまでに純友もなげにぞ申たる事光熟く考ていそ引おもち
なきんねるが独るぎおて彼使者によせく陣中の要害内さんねるべし事光どの
あがあまり体のあるりて落てよりるさ彼奴の気達ろうるんと読へ公ろう指を
さし立んようへたく引出討て奪んと云ひしがいやく何事にもせよ上意を純ぞしく


官軍法政
と敵の統素
和睦
乃
図



[illegible]に深せん楚忽のいとう然べしうまて作のものをたとひ六人十人深もとそ伯
父の陳とうはいやもべさしくうひ逆しく懸げに面をわらげ要細れ作いを吐とみ
だたやうに笑へんにむひとおくうひくゆ上だたにくい某本陣へ来くゆ来ドい
かんまでいまづづく術結ひくとく庄紙をくひそうにものうものを拵たるうび焼
ひとくとそくやづく術前るはうひ出たくの来にくいへうび計いいうんやとゆれ
ぶ和たる助法伸吟もわく拵へびううくとまあ多ひやうう計しわうの其後五石と
のくまひ五べを光もなやしくうひるうえ繼を
今もやうしゆまんぶんとさうにぶも法ひるく法方に服を賦て大拵に渇しをする
法伸のくまひくるる実もうく国く匂くとくくく教目を練る来ひとにるの心にあう拵
に拵を悔を[illegible]くくあくく和れに法伸しを[illegible]の和平とを五全
伯の条天下の民のふをとるしまをるて紙秋くいびを賊を好んや今育已に
教文ぬ昭日かるうびうん来に入びしと兵法くやづく術いうをび拵へ

前ニ十四

すくるえ繼へ後くくる心地しくを拵びへ男こ豚中に[illegible]ゆうね其後宗後の術一族を
えるび術前に知く惟今の術逆言修くに拵家の術は法教のうくくに為拵に細に
ていいうる賢を[illegible]やうんと面くゆや　ゆ中くる備仲吟を拵ひへざくをたにあくびをへ教
のそくくくかへくく味方の方後くゆうぬ教の後為法教ゆ教をを[illegible]で其西へゆむく浮梵の
合戦をびまり物法りの會くく世のくふかくくそこに信紙まふをとうんでうれと
教くく城中にまひとうを世撃んとを今まこ[illegible]西へを和くるくくゆ拵くたくとうん
くくに教の謀へ河く味方の御くとうるくくくへ焼山が言に豚中の兵くうぐく柵
下に出て会を多のある百修人を拵くんとを山百修人に宗ぐ紙まふ後拵耳目となく
たる兵ども[illegible]ん術方も遅兵百修場にく拵へ紙まふる不紙まふが計たるひへ流と
ゆへくるう法兵の後ゆるうそこ二たへうでもぐに酒宴をるん附味方の足猪ち
うこの陣屋後術つ大とくるゆを教の百修人宗五伯ぐ世ぐんとくたりてさへんう
代財力をあわにそたうん兵紙まとうを五伯に討へ柵みにそくる五ぐもはのくるに繼

て城中に入んとせしその時味方の勢敵と城中に入まぎるゝに強て甚だ
難面裏にまゝにぞ陣中に納めて討を企てたりける敵競爭て城に入
とて陣の張を自在するまで術方なく敵に城へ入ぐ落ることなる
人物べきる易に強く十方に落ぶたゝへ城中にて紙を討のゝ仕もと
行くくて城とるて伏ぬんとのゝまへ入るべきる所に振くいさこをぬ
たるうくん

滿仲未駕欲城中

同月十三日夜陣和睦と文えれば法華ようとびとなさとて事已城中に入
給のごくこ多勢の兵甚目の色の別づりにる柵外に出て遣の城ぶうる面四
ものなで惟幕とるべて陣しろう官軍にも難面仕事体に納りたるぶんし
ぞんのいるる術やちいらん他ひるぶ仕奴多年三方詰ぶ大ねして
柵下に出て陣をとる城中に待る兵の兵るでい紙ふぶ仕中の様としふの色

前三ノ十八

那て年の上別る大ねたる敵添海仲赤地の鎧の色花に菊黄白の猛者と色
衣冠正く月毛の馬に金覆輪の鞍置て赤ト紀数群泥多冬花に立方と
ねて大ねのたに引添てで作いる兵湯射を先望とこの一騎面十とる武既
たる出る布衣の下に接出先く前後たに甲冑と其の外兵泥物具に
て二十餘人後に候ぶそでに大なの城ぐ出すく打事の張へ指兜紙赤大紋に三為
帽子者く一の関まぐ出ひ宮仕に待ぶ整首踏躍く犯を悔晃を耐る
て出来焼ひ出ひに遠ぶ拝謝しく年く有酒肴猪を設く客意遊るて為
るぶ敵敵巡ぶく後年のぶ十二六七八九二十ぐらの女十餘人列に侍舞伏
ぐら面の粉脂を粧ひ経著香堂中に薫ぶすくうて所敬にまうう舞曲謡歌
しあくる夜八千年の樣時と為て彼ひてる花の色紅葉の山にさ夕月湯を曝に
ぐくる面宴数刻る夜んぐ酒を異に入たる中に兵湯射を先へひそうに席を
結くぐ一人城中とまめぐうてちかしこの詩ぐまくく仏左やあるらんとえ過り

前之ノ十六

たゞどもさして怪しき体もなく見えざりけり重兵衛はよく不審に思ひけるも紙筒附てえ
るに中門のたのかたはらに此一條の隙どありてみえければおのおのひそやかに此処を出入れ
通されば木の間にも此ありて窺ひさまどて其辺をさぐりけるに方口の雨戸の
柱の根ありさて先に外に綱ひ義とらへたる兵を宿しける所に耳を地に付てさく密
より物見たる兵は三十餘人徒並たまひ候の食物なりくくいえたり重兵衛打領き
根拵しくかくらひつゝ隠そうなくてかりさんもるに二の城戸の塀際に忍び入りへくらくもなく
後をとりたるを持しまるく件の柱のもとにちり八方手分をなさりければ中途兵の出べき
ことなければりしう振廻く暮をまじはるや申刻ばかりなりけるに附手もすみぞとおもひ
足軽の兵ども此先と同合しく御とろく本の庭に至ぬ足軽ども皆けくに堂に紀
こひそれにちかし此の櫓役所へ火を放ちし其家の兵ども多くあはせ給へどもおもひ忍びに
ありけるに多くの猛火にかゝ餘煙おもひ来りければにらへてとくさくらいて見よりとて
ねおつは此体を見ければもつきしもの侍にて盃敵傾逆をおこしけば弥

兵糧乃會にてぞありける満仲の下ば久しかる紀日の薪多るでんど軍兵を鼓
し入兵の餘り追出の糸を立て云ふ事に謝するに言ば又てそろ気に入りしか
起四へは純友はしたる言あるくの障子をあけて入らんとは田井十年正路
帽子布衣かるぐりまく來り行く純友が大紋乃袖をひき元実容近く附客人
あるく門に送る事をし人倫の礼に背かり携ゐるく引立るを純友かねてより思ふ子
く組合紙下へともに合たり元来純友は大力の覚ある者なりしが才の滅すべき財宝
はさくやあくりん大紋乃袖大口の裾に手をやり足首立る事もならざりければ遂に下
に座して首を放ちてぞり城中の兵どもかの子をとらせがんとさくなとさしねひたるに
兵ね純友が首捕らしまししければいよいよ機をとして唯あさまでてる体にてかくて
に細さ居るの中にも様へ父子はは身が事なる数合十餘人各力の定なる所に
とさのしく討くかるを御方の兵は庭前に徒ひそく此中にくりちまりく一人も残さば
討とめけるさしも長くの軍に手柄をあらはし武威をふるひし純友悪なりける果

はぐが如く直を好とならバしかり君子とハ可逝也不可陥也可欺也不可誣也

箱崎合戦純友一族討死

純友が太宰府城も好古経基の武功によりて没落し其時ハた馬助満仲が智謀によりて橘遠保純素の命を殞し九州已に全く治るといへども伊予掾純友が方なほあまたありぬれバ猶大将純友の武勇の威ハ甚しく止宿しもひ人を徒方なくならしむ純友が主…とさだめ…ひとへに純友ハ数度の軍に一族数多討せつなけれども其身ハ恙なくして小船二百余艘を随へて二月十四日筑前の博多の津浦に漕つけさしもあらく海賊悪党を是へ所々の盗者なかりあつめ其大勢なるされバ猶多のほとに押寄勝負を決せんと企ける所にのりし長門国に稲村平六景家純友が下知に従ひて国司の命をそむきかびやうに其外安芸周防辺も海賊蜂起して神社仏閣を焼払て什物重宝を掠奪し居民家にさしも入て私財雑具を集め同代地…剥とられども賊衆大勢にてたやすく

負る事なしされバなれて山陽道の早るもつまだ洛中ハ殊外に騒動して公卿僉議ありて於てか大将軍を以て好古経基に力を戮せ不日に追討すべきしとて今度も又参議右衛門督藤原忠文を征西の大将として太宰府を下し天慶四年四月廿八日に都を出立て五月廿四日伊予掾純友千余艘の船をそろへ博多の津へおし寄たり官軍も渚に陣をとりて先矢軍とぞしたりける六孫王経基ハ軍にむかふていふ武者の陸にあがりたりけるが船の用に立ざるあさ浅瀬と一所に集りける所の遠浅にのりしを見つけて射かけわざとむかふ雄乃海賊ども是三二に…其時御方の寄兵ハ…敵の入るを…正兵ハとりて圍に…敵わざと引く…甚怨に賊船に乗移る…とて陸へ掌して…下知しされども其日ハてで矢軍…合の勝負ハ…翌日…の時間より小舟三艘漕よせて其勢百騎ばかり陸にあかり純友の先陣近国九郎が二百余騎にて…ぞ戦ひける

大幸春実謀叛
そはく紀友ゞ賊徒
を焼討を
伊賀秀左平
討死

寄せてこゝかしこに手痛くも戦ひけれど受太刀になりて討るゝもの大半すてゝはかけぬけ汀
まで引退てやがて船にぞ乗にける広国九郎もつゞいて乗らんとせしが手の深ぞ
引まはる直に後五艘三艘づゝ寄せて戦ひかゝりければ四方に子細あらじと見へて
毎ごとに引返さんとする程へ扣へても官軍は陸へ引上りて陣を取けるが船には未
様もあらんとたゞひたすらにさかひにかゝりて官軍は扣へたるゆゑ船には乗も
若年大義近来兵の一宗徒ども八幡の御神の命を受るまでもなく将多摩を引て船中に候ひける
一つの手段とする処へ先手小船百余艘艨艟舳艫に櫓をこそかけて引自在するやうにあがりてへ
追手の兵船と打崩して二十余艘を被討く風暴れ日なきぞ待にたる同月廿九日午刻
よりあらびして風吹て海上波あらくぞ待ち日ならずして牟婁の浦津
也風とひとしく源氏ゞ剣も将の源にる純友も今日は海風暴に
よりて軍をやめ数千の兵を下して船底に打居たり其中にも安芸のえ三郎
為真海路遥に睨る風も

厭ひをせまりしと見て怪しめく見えたる純友が枕にちかづく今より小船百
余艘を乗せまうけはなの敵にてやぶらん街耳ければ純友枕を
も持て其あらん平五家臣が長門国を攻ひければ来国とべきと申つるが一定稲
村が舟ちかし給天もせざりける若輩に宮に国にわたる将等
件の二十余艘に火を付風上より寄るに如法闇にて風あられば巻十夜
飛ちりて様楯の船に火付られば賊徒以外に騒ぎて防がんとせし
めれる程にあらひは已が兵船を焼まあるひは夜に付逃んとあれば
千尋の蒼海して底を知ねば防んとすれば前の紅の猛火として迫り
あらぬに掛れば其儘に焼殺されあるは海底に溺れ
目もあてらぬ阿鼻大城の罪人の十悪五逆に責らるゝ熱湯
の底に溺れんもかくやあらんと浅ましく純友が乗る船は不思議に火をのがれて忘
として伊賀の今は運命もぬるのに

手柄の近付者代官はまいはまとうたる味
方の五人を敵にして敵と打合者んとも伊勢まつの敵に死手てかかこう
こひに手ふうり切てきりし分野いまと情なる村熱これを感ごく守り伊に
ふくく強くてくたりも後力もこれ強年もりわたくりちに若狭国の住人神
沢孫九郎四実。藤田孫八郎と武かすくく大力の到者伊勢まに紀ん之敵
先年ねもせび引ちぐくねと踏たりれば二人ともに同じ枕にたくまたりると証
も立たた右の敵にとくくと勇にもさ命り矢者ちとに仕つ
べき者と完四まび個たちぐせくせんとと共に海中に死んぐで入にくる真外の紙
後者あるひ人に焼を的に鬼まるひと長矢こうたれば芝の年を実討死者首
しりのせくあとにうまだ家あたれの実拾にぞ伝りくんにゆしてぐ人にたる分
かくく紀友に遠く命たとりてもつ国梅村平二景家ぐの結る長府の城にあり
長りる紀友にひるい押をねるあ平年中より今天考にいると感を西国に振ひ

前三ノ廿一

身りいん運を達家てたれぐくもぐくと後代切んまも流石にとくこえ
まべ今二度故体ふあ多く武勇り行とも敵に数れ今りも討ちく其後住く
討死せぐやとろりくくにくく汁ひまとりくれば平二景家をみ出く御後の
ぐく此数ケ年法図の武家役所ケ威厳く三たに温三天下乃人の貝代勢ることと
人ども未御運財ぐかく洗論まて宿れくくにくに矢代ぐくそ代
伊狭にも今一軍くくの二弟に対ぐ厳くくたくんくるんに法あぐくまみ養
たる思伊方の場乃中にも命まくくんとろ人ぐ早ちり出代本国にくを
あべ出家一番に討死くくこ遠の川の頼踏伊ぐ代さくけ三ぐくく真防僮
二天百捌二月六日に長府と立く長家西国と白ひりくるぐに孫三伊長会御行
敵乃有ありく紀侍乃八情天に海ぐ人も幣ま作く後作を中に宿孫に鎖と
就ぐ大ねとこいち伊西と下さま満在二敵とかこびける附後夜に居こりくるぐ供の
雑人多経る敵敵乃勢辺付ぬくさらに会ると天沼さに使たまちあるまのやう義

六孫王名将
八幡宮ノ神号
を云て御盃
と下されし時
漢よう紙紅
殺十級ゐく
ち者くと書く
改つけく
勝利成

さんくう事とものうちもひきとい人宰少弐光雅御前をとつて松浦の端よりのぼりさ
しくやかくかくの来てくやなるは何ぞれにも織紅くえんじれが小船七八十艘もかねんが
いはば海上大かた里がけに乱れたりてられども順風に帆をあげてかいがりかるこそ見るべく
ぞや中なる時しき御前にれいきける早旋の兵若共天晴此浦にまずかけて討れなく討殿
の旗を靡んとてひきると二人孫三郎とし石からくもととしもやつて不覚の事のみ今
はげく敗走の軍にお負てわるひは討まとあるひは降人に成て中にも又孫三郎其外お
捷の国兵ども門さく大敵に当らんとて少しもおくの者よも一人も残さくてらんとて忠
るとのわるべしに十死一生と究てよせたりけんと兼て忽にかくとうてんてせどもくの軍
兵とつはものみん敵方は御方の軍は千騎二千騎で入かへて鋒を尽し必死一人のある
名にせんとて入るの者どもを千騎の勢有るべからず敵にはへ入らるる若手も首肢に
名にては大将にかくても陣中に入るもに破れて其辺をでくおくべきぞ其つい死まで
て松園の鼓を打て十方より寄合く引退て討くだし小勢とをひ掛て

不覚の事あるとくやがて陣くを分ちてあく一人の押の勢とさぐ若き待ちうけたり
おどに純友は将多の津によせんとて帆の下に櫓を立てとばりてかけたりかれ
六月十八日の午刻に和布の浦を通るとて潮を蹴と見ゆるにし八幡宮の宝殿
より本陣よし松浦に白旗に又十流翻りて坊の浦二三百騎にてひへうる備は経基
より陣をもどし足をとむるやられし楫を取て行まにみよせ鯨波を作りかけて
矢の一矢どもも射かけざるに稲村平六は京家又百余騎接つまとてかかりたる官軍八
あわの下知をも門く開て陣をきりて引ちんとてかけ通り交流しては潮りぬはく
二陣に陣より二陣もかくし園へは又入乱り綱を引ては遠矢に射かけかくのごとくを
ある寺七八度に及びたり京家時とえても見知ね敵の振回り者人の首捕んと
すべてこそおとて追付ねてしもなるべき陣を討死とさでみだく我首人にとらせんと
かけ向て正くもそまるんどに肘を接とん敵の恥ある武士のあれの其様るとべ
速も京家がれまに立者の自随ひさしくべくつて死を快くして名を知ぬ武士の手にて

にせうせんとて一族にる大にくまづくしと上常とんあ具後く校橋後一文字に添
切くたの後言こ呼へて逆に詰く中ぐ敵ぐ中ぐ一度に討死ぐ中せ
契つる言こ也も返ぐうれい敬も御方も相もに感ぐせぬらるうれと
さくく其外の兵八十餘人寄返く一人も残ぐに死ぐ一度に純友ぐ裏男伊
藤左帝右信は法師純年也と呼んぐ中自後の勢に目もかけぐた馬助
馬神乃又千餘騎ぐく北へ引ぐ中れ中ぐ国ぐう反軍陣
とろにけ間合せもせちぐ人寄正紀ぐもう進近ぐかけるもはしたまぐ多
いた本一歩武者ぐうるる四重猛に肩を引き撫ぐ疲はけくなくぐも
ぐうるるとぐも初長府と立一日より一度も引ぐ討死ぐんと紀ぐうる其言にや
駐ぐうん或ぐぐ後捨ぐはるひ敬と引紀んぐ見ぐ中ぐ死ぐもなう
ぐひくに討死ぐく泉に我とぐ殘ぐうる伊藤左帝右信は人数を後藤文橋
に討ぐ中ぐ其今人見はぐと合ぐうれい純年ぐうるれ中ぐ

見ぐてるの鼻を引ぐせぐ友宮ぐのにに追ぐうう三騎の自ぐるぐ人長面
もぐぐにたうぐく中ぐも其後討死ぐにぐ中ぐ二人共の諸に立騎う
已ぐ子に手ぐく能ぐ之騎ぐ見ぐ者に ちぐくもにぐ人ぐうるる其に敬
後ぐと後ぐ家本に中ぐ中ぐ中ぐれん今ぐ紀ぐ中ぐ四其身ぐ海ぐ洗
先ぐうる其外乃兵ぐも死ぐくの後ぐく命ぐ水潮ぐう後に浜ぐ名紀ぐ長ぐ
るに揚ぐぐ中ぐ中ぐ中ぐ

乃純友ぐ子虜

賊ぐの一族我ぐくく討死ぐく純友ぐ子ぐ陸ぐうのくくは京ぐ市ぐ九ぐくく
十二歳に成ぐうるとぐ元服の後ぐ中ぐく付ぐぐ兵ぐうぐ二百騎ぐうぐ紀ぐけ
る此者ぐも今や紀と潜ぐ中ぐと下知ぐ出ぐてくにやと相ぐ中ぐく聞ぐぐ元服の要
ぐうぐく若ぐうぐに素ぐ中ぐ一族諸侯討ぐに浜ぐ浦ぐ中ぐ細ぐく命
ぐくぐ紀ぐれぐうぐ中ぐ道ぐうぐ中ぐもやぐあぐ相ぐ中ぐ後ぐ之家ぐ今ぐ九別ぐうぐく

故ありぬ長門も兵乱ならんとてそれぞれたのみ合て安堵し用防もさぶらんとて
せんとそなへに付く先年伊豫を出てまもなく母を捨て妻つれこんそひ
出しかなしきかなとある者ども言いあへりくのようにいくらもるべきうたびたのみて一門と
かしこ出家人たのみもなう命をのびんとそひ付ぬることを陽明かしなかく
あるりん別宿をれば長橋の命秀之紙友がもとに出御一門大男若殿と呼ぶ
去年来くすれば仕くしたべ只一名に御ゑれば御と御ゑだり秀之御頸を拾ひ
海底に沒し故のように沒さぬ帝くに計てく其後冥途の御供仕うれんと申け
たべ紙友ゆもあびこれびこれ我後切くこそでに上帝くんとはぐくに仕られた
ほくしく事の次第そなへに我かくなる紙友をひまくいまでまと懐と呼ぶ此時にく
自害せんとて返々も遺恨なまれいもて幼少の身なまべ
ふしかなりてる人あじと光ゆまべ御一名くてびん軍と紀しくまをとを
こせんとそなへなりまく只一先線に沒くかまが祖父物盛入道に死けを其後

前三ノ巻五

ちくちくく自害せどやくそなへ紙友御伊豫御ゆれ
やくく今ことをくる樓紙びてをのごく旗ぞうを御しく雑人のをくる小
紙ぞをゆ様つくる秀之真とをゆし人に見くめる日を一乃月高人と憑
てんれく冊ちることを蘇度ゆ
於西くしくう言に匂くもが紙ぞ満にこだをせくの者ども見る十三歳之宝法帝
ぶ一度ゆのけくく一人も持びに付紙友に引ちくてを落ちくくを
しく九列をに及ぶ山陽ちに国ちびちくくり落人や年んぞんと其
国この七騎国日津こ浦こに兵ど出一国とをくてをかちくこう中に見伊豫国三
津乃候ど国ちる国代橋を保ち智勇兼備の者ちりきかくてちひるいを国い
於乃こ年国宜二ぶく紙友ち宗徒乃一族ちどの逃ちくこもやわんとはぐこと渡に
い兵一人もとうに逆本乃一年も引ど何とるき体ちんせくしちるる出に候年
とくくてぞうびくう紙友いかくこも年びに月十日のぬぐこれひそこに二体の渡ち

播遠保が
謀をもつて
紀友武を
と虜
と

とくむ[illegible]紙先とう奔りうれひ勇みの旗「ゆだれさ[illegible]」よく勢のなど日又一日隊の樓
と立てく出る紙友が勢ひも強ぶ[illegible]侍の故何ぞのことをうつぎさを打
賜く通らんとく百八十六騎の兵ども接つまてくさくるにかくとの敵ひげきの
来りうれ國ゑ陸つく百騎二百騎十方ようかけ出されぶくる業にれ遠く先日
義経にく人重ゑ対孔さびりしとるはひに落本く孔後乃勢と打んとよくゑ海
せぬるるうりうを保が勢八方ようかうんぐわ女に」と攻ようくるる城衆い
ぐくう陸へべきいまぐまは知もこさるに百八十騎うくまゑ」つくる後六騎ぞ対イくる
紙友今ハ日之死るに不とゑ八宮ぐくゑ勢とうまたかへくる如法力幸打れ三たに
ゆるるに乃引るうくれぐうゑ妻ゑれ付くうくる中に二十二騎切く落しくるに
たれるくゑ合せんとも出ぐ十方ようぐ攻くうける主保へ去ぬる弘平
乃此高國乃別文ゑく紙友たかへに一騎ゑ歩勇ようくれば其戦場と言
がんとゑひれ捕くを生捕きよと下知ようくるる法平ゑるまとび射ぐふくる

前三ノ女七

るの左後平頭ゑ後と肩がけく射るるぐに出るさくの逸れようくゑ
乃矢ゑ鎧ぬぐ射立ちまくつひゑ係まくに出ようかに死に人のゑ見るも亦
くにくくゑれ手ゑ先も生捕まくく眼おに敵し法中に引まくるとうくく紙友日
もくまとゑも強くせ先て父奪ひゑ七紙ゑにうくく真逆の旅ども侍ゑんとそ大
ゑ紙度げく進ようると東西ようゑ合せつひかくあとにうくくれあてやうあち
たに附甲も後く大きに欲るぐ敵ケ示のゑと負朱に落くゑゑ保が
ふにに出さまと互に目と目ゑつ合るに先ゑ先いぬぐおさるきひゑくゑぐ源ゑか
ひるるゑふゑにかくゑ先ゑ先ゑかにしあうくゑとゑく洞とくくとに[illegible]たくれば
ゑいくくやうくくゑて二目も祝ぐ前と低くぐ居ようくる明日拉引べくくく
ゑゑくゑ先一乃ゑる和におくめ赤ようくゑに頃六月上旬乃てくるまべを暑多
と見に流く汗流れゑくく痛涙弟に出ーかくくれば紙友たぐうくゑ攻メを出ー弟び
るぐつひゑ其敵乃暁叶孔に出ぐ孔ようくれと紙友ゑ人間るゑ先ゑ先ぐ孔中ーかゑも

吉法師くび切られしやうぐく紙友が首を刎くせ捕とりともに殺にとり上し
くるをたもも京都に送られしをぐに六条河原に引出し首と切くびとも塗
本はぐをかけらるとくる覆載者雖為天地之德日月不照於不忠之者 門言
誅不忠於臣一分とかくるべきにあらぬち滅び失にけり

諸將帰洛義勳賞忠文為惡霊

晋乃宮内卿実命を以く國人と感勅でむ六孫王經基六男侍乃軍に打勝く
國敵を成敗し生捕討死の首其外海中に流し土佐へ遣さるべき也るに
すべ紙友が息男伊藤左弟みが信は沿弟紙幸若猪乃紙之伝ち紙主
伊王丸英又稲村平六京家武藤弟乃之村又三弟為貞梅根孫七弟周
屋三弟又弟金剛左衛門八乃は九弟知盛をと迫めとしく一族張中二十六人
松原に行結波にて斬かけるうさしども首領紙友が首乃久さうらしび生て
に漂せく為ぶらるとるは月十日伊藤國にくを保ぶるる虜まさうふたし

前三ノ廿八